

【授業科目】病理検査学実習Ⅰ Practice of Laboratory PathologyⅠ

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
澤田 浩秀、千原 猛	2年次前期	必修	1	30	実習	あり	巻末掲載	可
授業概要 (内容と進め方) 及び課題に対する フィードバック方法	<p>授業概要／病理検査学で履修した内容を実践するために、実際の医療現場で行われる病理検査技術について実習を行う。病理標本として用いられる検体は、生検、手術など侵襲的な手法によって得られることが多いため、特に注意深く慎重に行われる検査であることを認識いただくとともに、適切な病理組織標本の作製「は正確な病理診断に直結することを念頭においていただきたい。本実習では、病理組織標本作製の基本としての臓器の切り出し、固定、脱灰、脱脂、包埋などの検体処理法、薄切（パラフィン切片および凍結切片）、およびヘマトキシリンエオジン染色を行う。また、細胞診検査として、検体の観察、塗抹、固定、染色などの細胞診表本作製の基本的技術を教授する。</p> <p>*実務経験を持つ教員が授業を進める。 課題に対するフィードバック方法／提出されたレポートはコメントをつけて返却する。</p>							
授業の位置づけ	<p>本学のディプロマ・ポリシー①「臨床検査の専門性と責務を自覚するとともに、地域に住むあらゆる健康レベルの人々に専門的知識と技術に基づき臨床検査を実践できる。」の達成に寄与している。</p>							
到達目標 (履修者が到達すべき目標)	<p>①組織の切出し、固定、脱灰、脱脂、包埋、薄切（パラフィン切片および凍結切片）、染色に至る病理標本作製を実施し、その技術的内容が理解できる。 ②HE染色を行った標本を観察し、評価することができる。 ③実験動物（マウス）の臓器を観察し、臓器の形態および位置関係について理解できる。</p>							
時間外学習に必要な学修内容および学習上の助言	<p>・解剖組織学、病理学、病理検査学の基礎的知識が必要になる。また、染色を行う場合に数多くの試薬を用いるため、化学的知識も必要となる。 ・1回の実習につき予習を30分程度行い、レポート作製および復習に60分程度は行うようにする。 ・実習前に必ず実習に関する内容を教科書で確認し、熟知しておくこと。</p> <p>※上記時間については、指定された学修課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間（2単位15回科目の場合：予習+復習4時間／1回）（1単位15回科目の場合：予習+復習1時間／1回）（1単位8回科目の場合：予習+復習4時間／1回）を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。</p>							
授業計画	<p>第1・2回 病理検査学実習のオリエンテーション、実験動物講習</p> <p>第3・4回 実験動物（マウス）の臓器観察、および臓器採取</p> <p>第5・6回 病理組織標本作製（臓器の切出し、固定、脱灰、脱脂、包埋）</p> <p>第7・8回 病理組織標本作製（パラフィン切片の作製）</p> <p>第9・10回 病理組織標本作製（凍結切片の作製）</p> <p>第11・12回 病理組織標本作製（HE染色）</p> <p>第13・14回 病理組織標本の観察と評価（HE染色標本）</p> <p>第15回 まとめ</p>						<p>澤田、千原</p> <p>澤田、千原</p> <p>澤田</p> <p>澤田</p> <p>澤田</p> <p>澤田</p> <p>澤田</p> <p>澤田</p>	
評価方法 評価基準	<p>成績は以下の評点配分によって総合的に判断する。 講義ごとのレポート40%、定期試験および実技試験60%</p>							
教科書	『最新臨床検査学講座 病理学・病理検査学』 松原修著 医歯薬出版 ※1年後学期「病理学」で使用したものと同一			参考書等		『JAMT技術教本シリーズ 病理検査技術教本』丸善出版 『Medical Technology 別冊 最新染色法のすべて』医歯薬出版		
学生へのメッセージ	<p>・試料の固定にはホルマリンを用いるため、取扱いには十分注意すること。また、パラフィン切片・凍結切片の薄切を行う場合に刃を用いるため、怪我をしないように注意すること。</p> <p>・病理標本として用いられる検体は、生検、手術など侵襲的な手法によって得られることが多いため、特に注意深く慎重に行われる検査であることを認識いただきたい。</p>							